

談話レベルと名詞句

——「は」と「が」と「の」——

Niveau de discours et syntagme nominal

——particules *-wa*, *-ga* et *-no*——

岸 彩子

KISHI Ayako

談話レベルと名詞句*

——「は」と「が」と「の」——

Niveau de discours et syntagme nominal

——particules *-wa*, *-ga* et *-no*——

岸 彩子

KISHI Ayako

要旨 : Nous tentons d'expliquer la différence entre une phrase avec *-wa* et celle avec *-ga*, en les mettant en comparaison avec l'actualisation d'une phrase en français, qui se réalise sous la forme de « sujet-verbe fini ».

Noda(1996) décrit *-wa* et *-ga*, en couvrant pratiquement tous leurs usages. Cependant, il n'explique pas comment une forme identique de *-wa* peut servir à marquer d'un côté le thème et d'un autre côté le contraste. Il n'explique pas non plus comment *-ga* peut marquer à la fois le sujet et l'exclusif.

En nous appuyant sur la notion de « domain of discourse » (Recanati 1996), nous distinguons deux domaines ; l'un, limité à une perspective spatio-temporelle (domaine-t), conduit à interpréter l'énoncé comme perception, l'autre, qui est déterminé par le thème et qui n'est pas limité temporellement (domaine-non t), exprime un savoir.

Nous formulons une hypothèse comme suit ; une phrase japonaise s'actualise non pas par la liaison du sujet et du verbe, mais par la détermination de domaine, soit domaine-t, soit domaine-non t. *-wa*, le thématiseur, fixe le domaine-non t et la phrase avec *-wa* exprime une propriété, qui est un savoir et qui n'est pas limité temporellement.

Un domaine-non t peut contenir un autre domaine-non t, à la différence d'un domaine-t, qui ne contient qu'un seul procès. Quand un *-wa* introduit un sous-thème et quelque chose est

* 本稿は、日本学術振興会科学研究費補助金（基盤研究B 課題番号18H00677）の補助を受けた研究成果の一部である。

nié dans ce sous-thème, cela implique que tout le reste du domaine supérieur n'est pas nié, d'où vient l'effet de sens contrasté.

-ga, qui garde la nature de génitif de relier deux noms d'une façon « seul à seul », relie au noyau un nom, en le mettant en statut exclusif. Ainsi, quand le noyau est l'infinitif d'un verbe, le nom relié se comporte comme un actant essentiel d'un verbe, dans la plupart des cas, le sujet.

キーワード：「は」、「が」、テーマ・レーマ、主題、主語、とりたて、対比、排他、時間的限定性、解釈の領域、actualisation、génitif

1. はじめに

フランス語では、主語sujetと動詞verbeで文が成立する。この主語と動詞の結びつきは、述語動詞が主語の人称に呼応して変化することaccordで表される。次の例では、述語動詞「得る」の完了avoir euは主語Thomasの人称に合わせ、a euとなっている。

- 1) À la naissance, Thomas *a eu* un très beau cadeau, une timbale, une assiette et une cuiller à bouille en argent.

(Jean-Louis Fournier *Où on va, papa ?*)

「トマは、生まれたときにすてきなお祝いをもらった。銀のコップとお粥用のお皿とスプーンだ。」

(『どこ行くの、パパ?』ジャン＝ルイ・フルニエ 河野万里子訳)

このようなタイプの言語において、文として成立する最小単位は、主語sujet－動詞verbeである。動詞は主語と結びつけられ、その人称を帯びることで初めて定形 (fini) になり得る。

- 2) Thomas *a eu* un très beau cadeau.

(cf. Thomas - avoir eu un très beau cadeau)

定形になったことで文として成立し、ひとつの考えune penséeを表すものとなる。このことはフランス語学で現動化actualisationと呼ばれる。

この主語－定形動詞の形は、日本語に訳されるとき、二つの異なる形態に分けられることになる。一つは「は」を含む形で、もう一つは「が」を含む形である。例1と例3は同じ作者の文章

を同じ翻訳者が訳しているが、1では「は」を用いて、3では「が」を用いて訳されている。

3) *J'ai encore l'assiette à bouille, je m'en sers comme cendrier.*¹

「お皿は僕がまだ持っていて、灰皿がわりに使っている。」

フランス語では文の構造は一つしかないが、日本語ではそれが二つの異なる構造に対応している。これは何を意味しているのか。二つの構造のいずれもが、同様に文構造であると捉えられるべきなのだろうか。

日本語の主語を巡ってはさまざまな議論があるが、「が」を主格と考える研究は多い。だが、フランス語の場合と異なり、述語動詞に「が格」との結びつきは明示されない。述語動詞に結びつきが明示されないという点は、「は」に関しても同様である。

また、「が」、「は」のいずれも含まない構造が、文相当の伝達機能を有しているように見える例もある。例5に示したように、フランス語では、主語のない構造は文としては成立しない。

4) (食卓の大皿に盛られた料理を指さして)

A-「食べた?」

B-「うん、食べた。」

5)

A-Tu en as mangé? / *As mangé?

B-Oui, j'en ai mangé./ *Ai mangé.

日本語の「は」あるいは「が」が動詞に結び付いた構造、また例4に挙げた構造は、通常、文であるとされる。だが、上の事象を鑑みると、日本語の文の成立の仕組みは、フランス語に見られるような主語一定形動詞からなる文の成立とは、異なるのではないかという疑問が起こる。日本語におけるactualisationはどのようなものなのか。

筆者は、岸(2013, 2014, 2015他)で「解釈の領域」という概念を用いて、フランス語の直説法現在形の様々な意味を統一的に説明することを試みた。そして直説法現在形という同一の形態が複数の意味を伝達し得るのは、現在形の形態自体は時間的な意味を持たず、異なる領域に置かれて解釈されることによるとした。また上記の領域を、局所的一時空に限定されるt領域と、そのような時間限定のない非t領域の2つに分けた。

本稿では、この解釈の領域の概念と、dichotomieを用いて、「は」と「が」の使用を説明することを試みる。上記のdichotomieは、出来事文／属性付与文の対立にも重なる。文が出来事を伝

えるか、あるいはモノ・コトの属性を伝えるかということは、一文だけで決定されることは少ない。本稿は一文の構造だけでなく、文脈の中、談話の中でどのように意味伝達が見ようとするものである。日本語の文のactualisationは、フランス語に見られるようなsujet-verbe finiの文成立とは異なる仕組みであり、文の解釈の領域が限定され、その中で解釈されることでなされ则认为る。

結論を先取りすると、「は」は解釈の領域を限定する機能を持つ。これに対して「が」は名詞、もしくは名詞句レベルの構造に唯一的に結びつける。この「が」格による唯一的な結びつきは、フランス語の文に見られるような、主語のための優先的な場所が用意されていて、結びつく前と後で動詞の形が変わるという特権的な結びつきではない。この「は」、「が」、それぞれの機能が、談話レベル／文レベル、あるいはより下位の名詞句内で実現されることで、対比、総記などの意味効果が出てくると考える。

2. 「は / が」と文成立に関する先行研究

2.1 川本 (1985)

フランス語の文成立の仕組みと、日本語の「は」と「が」を対比させた研究に、川本 (1985) がある。川本はフランス語の強調構文のうち、主語を強調する構文である « C'est...qui... » に注目する。例 6 のように、日本語においてはこの構文に「が」が主語である文が対応するとする。

6) C'est moi qui le sais. 「知っているのは私だ=私が知っている」

« c'est ...qui... » のいわゆる主語を強調する文形式を日本語に訳すにあたっては、「…するのは…である」とするのがしばしば用いられる訳出法であるが、日本語の文では主語に従う助詞に「は」と「が」との 2 種あることを思いあわせると、あるいは « c'est...qui... » の形式を正常の文構造に戻して、ただ「は」と「が」との使い分けによってフランス語の文の二つの異なった構造が表現できるのではなかろうかと想像される。(p. 44)

川本は、主語—動詞で作られる構造を分析するのに、テーマ・レーマ構造という切り口を用いている²。テーマは「それについて文が何事かを述べるもの」であり、レーマはテーマについて述べるその「何事か」である。フランス語のような言語では、主語とテーマは一致することが多

いが、そうではなく主語がレーマと一致する場合、そのことを、上記 « c'est ...qui... » の強調構文で際立たせることがある。この場合の対応形式が「が」を用いた文であると主張される。そしてそれに対して、テーマが主語である場合には「は」が用いられるとする。

「は」の対応形式として « Moi, je le sais. » のような phrase segmentée の構文を、
「が」の対応形式として « c'est moi qui le sais. » のような、いわゆる強調形の構文を指摘した。(p. 59)

この説は、主語に「は」を用いた文、または「が」を用いた文の多くの場合を説明する。現在、「は」が主題（テーマ）を表すことは多くの研究の共通認識であり、「が」がレーマを表すことも多く知られている。

一方、この論では、通常主題とは捉えられにくい「は」がどう説明されるのかが明らかではない。例えば、次にあげるような、いわゆる対比の「は」が説明できない。

7) Macは分からない（が、Windowsは分かる）。

また、「が」に関しても、説明できない事項がある。「が」はいわゆる主語の他に目的語につくこともある。

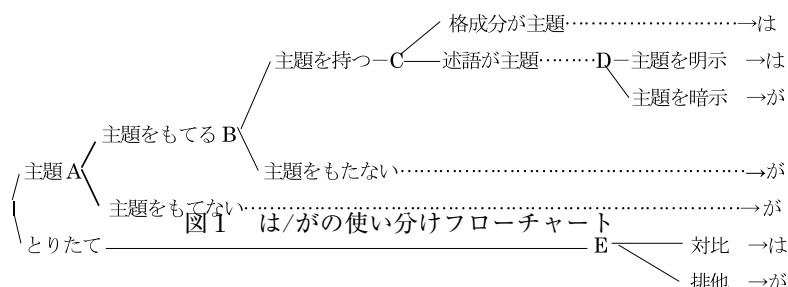
- 8) a. 英語ができる。
- b. チョコレートが食べたい。

川本（1985）は「「が」は主体を示すことを職務としながらも、それはフランス語の[...]主語が主体を標示するのに比べて、主格をやや稀薄にしか持ち合わせない」（p.68）としていて、稀薄であるとはいえ、フランス語の主語に対応するような、いわゆる主格の「が」のみを考察の対象としている。主格ではない、例8のような「が」にも、「レーマを表すもの」という考えは適用されるのか。

2.2 野田（1985、1996）、庵（2010）

野田（1996）では、「は／が」の様々な用法の場合が記述されている。この研究は、現代日本語で考え得る「は」と「が」の使用を網羅していると言ってよいだろう。「は／が」の使い分け

は次のフローチャートにまとめられている。



野田（1996）では、「は」の基本的な意味は主題であるとされる。また「が」は主格を表すとされる。それぞれにもう一つの意味があり、それが上記のチャートでは「とりたて」とされている。「は」には「対比」、「が」には「排除」の意味があるとされている。

「は」 主題———対比
「が」 主格———排除

野田はこれらを「は」もしくは「が」の持つ意味として別個に立て、どちらかの色合いが強くなるかで、解釈が変わるとする。

だが、「対比」は、意味効果であり、主題 / 非主題という文の構造の中の役割と同列に扱うのには違和感がある。文は、談話を構成する要素であり、情報構造（主題（テーマ）かレーマか）は、どのような文にも関わることである。それに対して、「対比」はごく限られた場合のみ生じる意味効果であって、この二つを同一線上に置いて扱うことはできないように思われる。主格の「が」と排除の「が」を同列に置いて色合いの濃淡で考えることも同様である。

主題のマーカである「は」が、なぜ、そしてどのようなメカニズムで、「とりたて」、「対比」の意味を表すようになるのか。また「が」の「排除」の意味が「が」のどのような性質から派生するのか。なぜある文脈では「は」が使われ「が」ではないのか、またはその逆なのかということ、できれば主題の「は」と、とりたての「は」、そして、主格と言われる「が」と「排除のが」を関連付け、統一的に説明したいところである。

庵（2010）では、この野田（1996）での成果が日本語学習向けに簡略化され説明し直しされている。庵（2010）では、次のようにまとめられている。

節の場合、無標の場合は「が」を使う。文の場合、無標の場合は「は」を使う。
 このように規定することによって、注意すべきは(8)の原則が成り立たない場合
 [=有標の場合] だけであることになる。節の場合、それは「けど節、が節」の場
 合である。文の場合はやや複雑である。ただ、文で「が」を使うと特別な意味[総
 記、排他]になると規定しておく。[…]

このように、原則として、文では「は」を使うということが示されている。また文よりも小さい構造である節では「が」が使われるとしている。この指摘は、本稿が問題とする、文の成立 actualisation に関して示唆的であると思われる。しかし、これがどのようなメカニズムによるものかは明らかにされていない。

2.3 時間的限定性 工藤 (2012)

工藤 (2012) は、時間的限定性という観点を取っている。時間的限定性とは、知覚・体験できる一時的現象であるか、思考によって一般化された恒常的特徴であるかのスケールの違いに関わるカテゴリーである。

工藤は、時間限定性がすべての文をとらえるものであるとし、主語における「は」と「が」の使い分けも時間的限定性が規定するとする。

基本的に、時間の中で動的に展開する個別具体的なものの“運動（動的現象）”は、知覚による感性的体験によって確認できる。一方、ものの恒常的“質”は思考による一般化（判断）であり、主語は『は』になる。(p.174)

工藤 (2012) は上記のように、“運動（動的現象）”を表す動詞述語文と、“質”を表す名詞述語文があるとする。そして“質”を表す文の主語が「は」になることを指摘する。

本稿は工藤 (2012) の考え方を支持するものである。上記の時間的限定性は、後述する領域の考え方と重なる部分が多くあり、この対立が「は／が」の対立に働くことも本稿と意見を一にする。

だが、工藤 (2012) では、「は／が」がどのように使い分けられるのかが明らかになっているとは言えない。恒常的な質、特性を表す文の主語が「は」となることは明記されている。

9) a. ポチは秋田犬だ。

b. 山田先生は文学者だ。

知覚される、偶発的、一時的な状態を表す場合は「は」ではなく「が」となるとされている。

10) 花子が妙におとなしい。

だが、そうでない動的な文の主語はどのようになるのか。挙げられている例は「が」を主語に取るものだが、「動的現象を表す文の主語は「が」である」と述べられているわけではない。実際には、時間限定性のある「知覚による感性的体験」を表す文に「は」を使う場合もある。

11) 頭は痛いし、目はかすむし、どうも調子が悪いんです。

このような、時間限定があっても「は」が使える文はどのように考えればよいのか。

次章以降では、本章で問題として明らかになった、とりたて（対比）の「は」と主題の「は」との連続性、また、時間限定のあるように見える文の「は」を考える。これらを考えることはまた、「が」が本当に「主語」を表しているのかということを考えることにもなる。

3. 解釈の領域

二つの「は」（主題ととりたて）の両方を、連続的に考えるためには、「領域」という考え方が有効であるように思われる。筆者は、岸（2013他）で「解釈の領域」という概念を用いて、フランス語の直説法現在形の様々な意味を統一的に説明することを試みた。また上記の領域を、局所的・一時空に限定されるt領域と、そのような時間限定のない非t領域の2つに分けた。

工藤（2012）による時間限定の有無のdichotomieは、文がt領域 / 非t領域のどちらで解釈されるかというdichotomieと重なる。

3.1 時出来事文／属性付与文

工藤（2012）でも指摘されていることであるが、文には、大きく分けて出来事を表すものと、属性を表すものの2種類あるという点を確認しておきたい。これは、過去時制では、点過去／線過去のように区別され、フランス語ではそれぞれ、点過去は単純過去または複合過去、線過去は半過去に相当する。複合過去に置かれた「*Paul a fumé une cigarette.*」は、「ポールは一本煙草を吸った」のように一時点に定位される点的事象を表し、半過去「*Avant Paul fumait.*」は「以前、ポールはタバコを吸っていた」という、一時点に限られない、比較的長い時間的スパンでの事態を表している。これはCarlson（1977）のstage-level述語文、individual-level述語文の区別と重なる。図1で●で示した t_1 は一時点に限定されたstageである。stage-level述語文が「今・ここ」など一時点だけのことを述べる文なのに対し、individual-level述語文は「喫煙者である」のように個体としてのポール全体について有効な属性を述べている。それぞれ一時点に切り取られた存在であるstageか、時間に限定されない個体individualを主語に取る。この対立はまた出来事文／属性付与文の対立である。本稿で「出来事文／属性付与文」と呼ぶのは、それぞれstage-level述語文、individual-level述語文である。

この対立の重要な点は、一時点で区切られているか、否かである。出来事文はその一時点でのみ成立する、例えば「ポールがタバコを吸っている」という事態を言うもので、その一時点の情報は不可欠である。だが、属性付与文は、ポールのどの時点をとっても成立するものとして「喫煙者」と言っており、相対的に一時点の重要性は低くなる。またポールがタバコを吸っていない時点があっても、「ポールは喫煙者だ」は真であり続ける。属性付与文においては、時間性は薄いということが言える。

出来事文／属性付与文は、また、知覚可能な事態かそうでないか（VOIT Ipv E / SAIT Ipv P（Vogeleer 1994他））でも分けることができる。このことについては後述する。

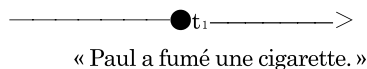


図2 stage

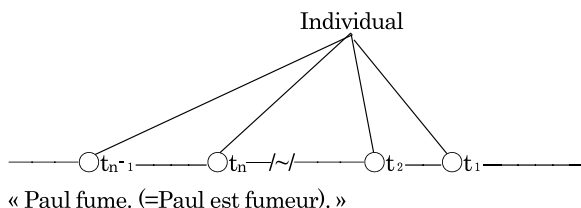


図3 Individual

3.2 2種類の領域

文が解釈されるとき、考慮に入れるべき範囲は限定され、その範囲はあらかじめ話者一聞き手間で共有されている。Recanati (1996) では「量子子が関連付けられるのが、ある世界全体とではなく、その一部分だけであるように、文もある「談話の領域」 domain of discourse と相対的に解釈される」とされている。

Domain of discourse (Recanati 1996)

So we see that utterances, like quantifier phrases, are interpreted relative to some partial contextually determined domain of discourse rather than to a fixed, total world. (強調岸)

domain of discourse は解釈時に考慮に入れるべき時間的・空間的範囲である。以下では domain of discourse を「領域」と略す。例えば次の例12は、「生まれてから今までに朝ご飯を食べたことがある」ではなく、「今日の朝ご飯を食べた」と正しく解釈されるが、この場合の領域は「今日」である。

12) I've had breakfast (this morning). (Recanati 2004)

領域：「今日」

例13には二種類解釈が可能だが、これは二種類の領域が想定されることによる。

13) Paul fume.

ひとつは一時空に限定される **t領域** である。ここで解釈されることで時間性を持つことになり、

「(今ここで) ポールが煙草を吸っている」と出来事解釈される。もうひとつの非t領域は、一時空には限定されない。複数の時空を、お互いの差を捨象して扱う領域である。「ポールは喫煙者だ」という解釈がなされる領域は、ポールが喫煙者である間の時間全体で、ポールの一生の間でもあり得る。非t領域では、文は属性解釈される。

この対立は「出来事文／属性付与文」の対立に重なり、また「知覚可能な事態として表すか、そうではなく、知識として表すか」の対立とも重なる。Vogeleer (1994) では、文が知覚を表すものと知識を表すものに分けられている。

知覚を表す文／知識を表す文 Vogeleer(1994), Vogeleer & De Mulder(1998)

VOIT (Ipv E)

SAIT (Ipv P)

Ipv: 情報にアクセスする視点の持ち主

E: 出来事, 状態 ... 知覚可能 (知覚主体の想定が可能)

P: 命題« 構築された概念の表出une représentation conceptuelle structurée » ...知覚は不可能

E (= 出来事) が知覚VOITの項になっており、命題pが「知る」の項になっているのは、出来事は見ることができるが、知ることはできない、命題は「知る」ことはできても見ることはできない、ということを反映している。知覚は見る人、知覚主体が見える時間的・空間的範囲、一時空に限られるが、知識は、いつでも記憶から取り出して参照できるので、時間的拘束を受けない。

知覚の文はt領域で、知識の文は非t領域で、それぞれ解釈される。知覚を表す文の領域は一時空に限定される。二時空以上を同時に知覚することは不可能だからである。このような文は「見たまま」を言うものである。出来事は一時空に限定された領域 (t領域) で解釈されと言える。

これに対し、知識を表す文の領域は非t領域である。知覚がその場で見た出来事を言うのに対し、知識は、知覚の「その場」である一時空から離れて捉えられている。知覚由来であっても、「このような出来事が存在する」は命題であり、知識として表しうる。命題は、テーマについて何らかのをのべるものであり、非t領域はテーマによって限定されと言える。二つ以上の出来事を関係づけるのも知識の述べ方である。一時空を超えたものは 出来事 (= 誰かが知覚できるもの) ではなく、知識である。知識として表されれば、一時空の限定は無くなり、時間性は重要ではなくなる³。出来事ではなく、知識、属性として表されると生起時点は情報の一つに過ぎなくなる。

知覚を表す文においては生起時点の情報が本質的であり、不可欠だが、知識は記憶内に格納されておりいつでも参照可能なので、一時点に束縛されない。この意味で、属性付与文には時間性は無くなると言える。

「は／が」に関してこれまで見たことを、領域という観点から整理すると次のようになる。工藤（2012）に従うと、「は」の文は属性付与文であり時間性を持たない（あるいは薄い）。ということは非t領域で解釈される文である。また、出来事を表す文は一時空に限定されることから、t領域で解釈されるということが出来る。一時空での知覚を表す文には「が」が用いられることが多い。

「は」または「が」を使う文の大部分はこれに従うが、2章で見た問題点は残されたままである。すなわち、主題の「は」と対比の「は」の連続的な説明、および時間限定があるように見える「は」文の説明である。次章ではこれらを領域の概念の下で捉え直す。

4. 「は」の限定する領域と3種のレベル：談話／文／名詞句

4.1 「は」の限る「枠」（「は」による非t領域設定）

主題とは「文がそれについて何かを述べるもの」であり、文の一部でありながら、文よりも上位に位置する。このことは二文以上を統括する主題があること、そして実際の文脈ではそのようなケースの方が多いことから言える。

次の例では、一文目の「障害がある子の父親は」は、この名詞句を含む文だけではなく、次の文、さらにはその次の文にも関わる。四文以上に渡って、共通の主題となっている。

14) 障害がある子の父親は、葬式のときのような顔をしていなくてはならない。十字架を背負い、苦悩に満ちた顔つきをしていなくてはならない。笑わせようと赤い鼻をつけるなんて、もってのほか。笑う権利なんてない。

（『どこ行くの、パパ？』）

この四文は全て「障害がある子の父親」についてのコメントを述べている。この主題は一文の範囲を超え、四つの文を下位に従属させている。「は」が後続する「障害がある子の父親」がこの三分が、その中で解釈されるべき範囲、すなわち領域を決定している。このことは次のように図

示できる。

主題：障害がある子の父親

葬式のときのような顔をしていなくてはならない。

十字架を背負い、苦悩に満ちた顔つきをしていなくてはならない。

笑わせようと赤い鼻をつけるなんて、もってのほか。

笑う権利なんてない。

図 4

「は」は、文が述べている内容が解釈されるときに考慮に入れるべき範囲を限定する。上記の例の三文は、この範囲にのみ適用され、範囲を超えて、例えば障害を持たない子の父親にまで適用されることはない。

フランス語の原文では、対応する個所では、Un père -> il -> il...と、主語がその都度明示され、テーマ「何について述べた文か」は文ごとに設定し直されている。日本語版では複数の文を、いわば枠で囲うようにまとめてテーマ設定が行われる。

15) Un père d'enfant handicapé doit avoir une tête d'enterrement. Il doit porter sa croix, avec un masque de douleur. Pas question de mettre un nez rouge pour faire rire. Il n'a plus le droit de rire[...]

このように複数の事態をその内部に含むことが可能であるのは、非t領域の特徴である。上の例のように、複数の属性を同時に考慮に入れる場合のみならず、領域内に下位テーマが設けられ、重層構造をなすこともある。次の例では、引用部分は、全体では、購入したベントレーのことにについて述べており、これが大テーマとして、文章全体の解釈される領域を設定する。さらにその内部に「は」で設定された燃費、色、内装（中）が下位テーマとして設定される。内装に関しては、「中」のさらに下位に「ダッシュボードは」とより小さな範囲が限定されている。

16) ベントレーを買ったのだ。時代物の〈マーク 6〉、22CVで、燃費はといえば100キロ走るのに20リットルも食う。色は紺と黒のツートーン、中は赤の革張りだ。ダッシュボードは黒檜の美しい木目仕上げ、そこに丸いメーターがたくさん並んで、

宝石のようにカットされた指示灯や警告灯が輝いている。

(『どこ行くの、パパ?』)

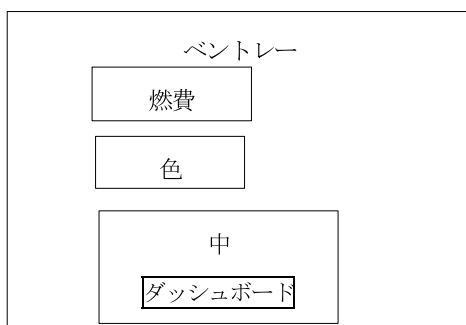


図 5

上記の図は、非t領域の中により小さく限定された領域があることを示している。非t領域には内部構造が存在しうる。これは非t領域が、内部に複数の事態を含むことができ、その事態をお互いに関係づけることが可能であるからである。内部構造を有するという点でも、原則として事態一つ分の時空に限定されたt領域とは異なる。複数の事態をお互いに関連付けて述べるということは、一文ではできない。「は」は、複数の文を統括する、談話、テキストのレベルに位置することになる。

上記の考察から、次のように仮説を立てることができる。

仮説 1 : 「は」は非t領域を設定する。

4.2 時間限定があるように見える「は」

ところが、下記の例のように、一見この仮説に反するように思われる用法がある。次の文章は、襖を開けて部屋の中を見たままを述べたものであり、領域は知覚の一時空に限定されているように見える。

17) ところが開けてみると、洋燈は例の如く点っている。妻と子供は常の通り寝ている。(『永日小品』 泥棒)

この場合、上記の例16で見た、「は」による下位テーマ設定（二つ目以降の領域設定）が、状

況によるt領域が設定されているときにも、なされ得ると考えることで説明できる。

上の例の文脈をより広くとって見ると、時間的に限定された事態が次々と起きている。「合点し」「飛び起きた」「開けた」「見た」のいずれも出来事であり、物語中の時間軸上の一点に位置付けることができる（下図 t_1 - t_4 ）。これらは時間限定の有るt領域で解釈され、物語中の一時空に生起し、知覚可能な事態を表すことになる。事態それぞれに一つ一つのt領域があり、それが時間軸上に積み重なるため、 t_1 から t_4 へと物語の時間が進む。時間進行は文の出現順を踏襲し、逆行することはない。

18) この光が届くや否や自分は火事だと合点し(t_1)て飛び起きた(t_2)。そうして、突然（いきなり）隔ての唐紙をがらりと開けた(t_3)。[...]ところが開けて見る(t_4)と、洋灯は例のごとく点っている。妻と子供は常の通り寝ている。炬燵は宵の位地にちゃんとある。[...]

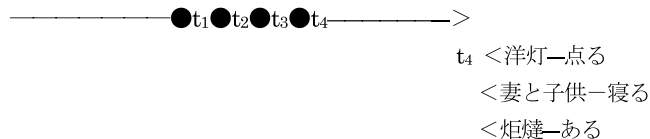


図 6

ところが、出来事文の連続、従ってt領域の連続で時間が進められていた語りの中に、「は」文が入ることで、一方向に不可逆的に進行していた時間の流れが一時的に停止する。例17では、その時点 t_i の状況の一部が、いわばクローズアップして描写されている。「洋灯」、「妻と子供」、「炬燵」は、登場人物「自分」が見た部屋の中の光景に含まれるが、「洋灯—点る」「妻と子供—寝る」「炬燵—ある」の三つの事態はそれぞれ独立して並行的に存在しており時間的な前後関係はない。時間は進まない。「洋灯」、「妻と子供」、「炬燵」の三つを別々に取り上げそれぞれの状態を述べているからで、ここでは非t領域が働いている。

事態一つ分しかなく、最小単位であった時空を、時間の流れの中から一時取り出し、その状況を「は」によって、複数の事態を同時に含むことが可能な非t領域と捉えることで、細かく分割しての描写が可能になる。「は」は非t領域を設定し、時間性をキャンセルし得る。この点で、t領域に一つしかない事態を述べるため、その連続が時間を進める一方である出来事文と対照的である。

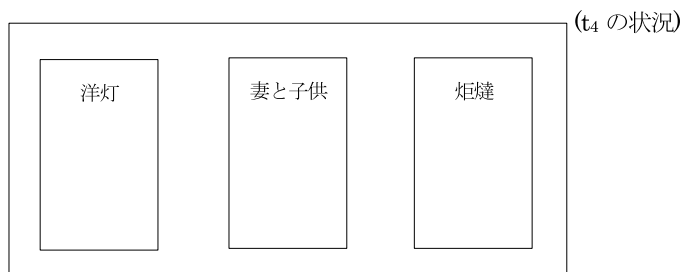


図 7

「は」は非 t 領域内を設定し、その中で複数の物事を並列において述べることも可能である。時間性はキャンセルされる。

4.3 「が」の要求する唯一性

上記の図 7 では三つの事態が並列的に提示されていることを示した。「は」を用いると、「並列されるうちの一つである」、「他にもある」という含意が生まれる。全体の中をわざわざまた仕切る必要があるとき、更に下位に枠を設ける必要があるときに用いられ、述べる事項が一つであれば、「は」を用いる必要はなくなる。そのような場合には「は」ではなく「が」を用いる。上記の例は次のように続く。「すべて」、「ただ下女だけ」という表現が、述べる事柄が一つだけであることを示している。

19) すべてが、寝る前に見た時と同じである。[…] ただ下女だけが泣いている。

語彙の意味で出来事を表す動詞が「は」とともに用いられるとき (ex. 「父は酒を飲んでいる」「頭はズキズキする」など)、類似の他を含む枠 (非 t 領域) が設定され「他の中の一つ」という意味効果が生まれる。

身体感覚を表す文は、普通「が」が用いられ、「は」は容認されない。

20) (医者「どうしましたか？」という問いに答えて)
「頭がズキズキするんです」／？「頭はズキズキするんです」)

しかし、複数の類似の事態を並べ、その全体で「症状」を表すようにすると容認される。

21) 医師「どうしましたか？」

患者「頭は痛いし、目はかすむし、どうも調子が悪いんです。」

全体が「私の体調」、「見られる症状」というテーマの下に置かれていて、その下位テーマとして「頭」、「目」が立てられ、それぞれについて述べられる。大きなテーマが設定されているとき、下位テーマをひとつだけ設定するということは無意味であるため、「は」を用いることはできない。上の例20、21では、医師と患者が診察室にいるという状況によって、予め「患者の症状」というテーマが共有されている。このテーマについて、テーマを一つ述べるのであれば、その場合は「が」が用いられる。そうではなく「は」を使うと、「他にもある」という含意が生まれ、例21のようにしないと据わりが悪い。

4.4 対比の「は」

4.1節でも言及したように「は」による非t領域の設定は枠に例えることができる。解釈時に考慮に入れる範囲を、枠で囲うように限定すると考えることで、主題を表すものと「対比」、「とりたて」と言われている「は」を、統一的に説明することが可能になる。

次の例で、下線を施した「は」は、文頭ではなく、文末近くに表れ、「文がそれについて何かを述べる」主題を表しているとは考え難い。対比の「は」、あるいはとりたての「は」と呼ばれるものである。

22) a. 「答えは君には言わない」

b. 「安心しろ、殺しはしない」

これを考えるために、次の例を併せて考えてみたい。

23) (「コンピュータ詳しいんでしょう？これ直せる？」と尋ねられて)

「Macは分かんないから...」(言外の意味：Windowsなら分かる)

24) (不具合が起きた時に)

「Androidはこうなるからな」(言外の意味：iPhoneならこうならない)

これら二つの例はいずれも、言及されているMac、Androidについてのことなく、明示的

には全く言及されていないWindows、iPhoneについての文であると理解される。なぜそのようなことが可能であるのか。

上の例23、24ではMac、Androidが文頭にあり、主題のように見えるが、単に主題の「は」の文と異なり言外の意味を伝達する。とりたての「は」の文である。これらのような「は」がある文には、別に、より上位に主題が設定されている。

先に見たように、「は」には「並列されるうちの一つである」、「他にもある」という含意がある。Macと並列されるものと言えばWindowsであり、Androidと並列されるものと言えばiPhoneであるということが、多くの人に共有知識としてある。これら両方を含む「コンピュータ」、「スマートフォン」が一文よりも上位に置かれる主題、外側の大枠として働く。

この主題が「全体」（より上位の枠）として範囲を限り、「全体が決まっている（了解されている、共有知識）もの」の一部のみを枠で囲い（とりたて）、そのみについてAというと、「残りについては¬Aである」と理解されることになる。コンピュータ全体の中で、Macについて「分からない」ということを言うと、残りの部分Windowsは「¬分からない＝分かる」と理解される。Androidについて「こうなる」と言えば、残りの部分であるiPhoneには「¬こうなる＝こうならない」と理解される。

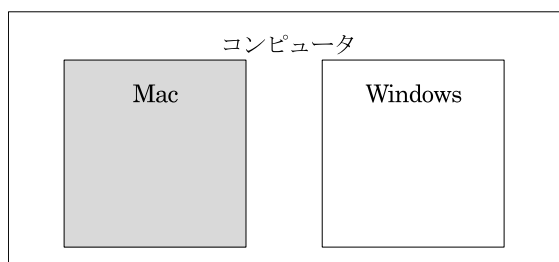


図 8

「答えは君には言わない」が、「誰かほかの人には答えを言う」ということを言外に伝え、「安心しろ、殺しはしない」が「でも、何か他のひどいことをする」ということを含意するのも、同じメカニズムによる。並列される同様の要素のうち、「君」、「殺す」だけを否定するため、残りの要素が肯定されることになるのである。

以上の考察から、「は」が解釈時に考慮に入れる範囲を限定することが確認される。こ

の範囲は、内部構造を有することができる非t領域である。

5. 「が」と属格génitif

「は」が非t領域を設定するのに対して、「が」は領域を限定しない。「が」の構造は常に、既に設定され了解されている領域内で解釈される。また、「は」が文レベルよりも上位の談話レベルに位置するのに対し、「が」は一文よりも小さい単位である名詞句レベルに位置する。本章ではこのことを確認するとともに、様々な解釈がどのように生み出されるのかを検証し、それらの用法に通底する「が」の意味を明らかにすることを試みる。

5.1 「は」と「が」：談話レベルと名詞句レベル

出来事文は「が」を主語に持つと言われることが多い。下の二例はいずれも事態あるいは状態の知覚を表す。知覚の一時空に限定され、その時空をt領域として解釈される、出来事文である。

- 25) a. 太郎が次郎を打った。
b. 風が吹いている。

この構造は、そのままの形でコト節内に入ることができ、文の一成分となることができる。

- 26) a. 太郎が次郎を打った－コト
b. 風が吹いている－コト

- 27) a. 外に出る時は、風が吹いているコトに気を付けてね。
b. 太郎が次郎を打ったコトは許されない。

文の成分になれるということは、「一がー」の構造は、文中で名詞句と同等のステイタスしかないということである。

- 28) a. 外に出る時は、{風が吹いているコト／強風}に気を付けてね。
b. {太郎が次郎を打ったコト／太郎の乱暴}は許されない。

これに対して、「は」はコト節内では容認されない。次の例が示すように、「は」は必ず「が」あるいは他の格助詞に変換される。

- 29) a. 太郎は次郎を裏切った。→太郎が次郎を裏切ったコト
b. 風はまだ吹いている。→風がまだ吹いているコト

「は」の構造は形を変えないと名詞句にはならない⁴。前章で見たように、「は」は文よりも上位に位置し、「は」を含む「―は―」は名詞句よりも大きい構造になるためである。

「―が―」が「―は―」よりも小さい構造であることは、「が」が「は」の下部に入ることはできるが、逆は不自然になることでも示される。下の例で、「は」の下に「が」が入っているaは問題なく容認されるが、「が」が「は」よりも上の構造に出ているcは奇妙に響く。

- 30) a. 京子は英語ができる。
b. 京子は英語はできる。(数学はできない。)
c. ??京子が英語はできる。

フランス語の文成立に働く現動化actualisationは、不定詞infinitifが定形の述語動詞になることで、抽象的・一般的な概念から、具体的・特定の一事態を表すようになることを指す。ここには主語と動詞の結びつきが不可欠である。不定詞は、動詞であるが名詞的な性質も有す。現動化actualiserされれば、構造はもはや名詞的な性質を持たない。

このことと、ここまでの考察を照らし合わせると、「が」を主格とすることに疑問が起きる。より上位に位置し、名詞句化されれば共起できない「は」との結びつきの方が、文の成立actualisationとの類似点が多いのではないか。「―が―」の構造は、現動化以前の不定詞infinitifの構造にむしろ近いのではないか。

以下ではこのことを検証する。

5.2 「が」は唯一的な結びつきを要求する

文成立actualisationに果たす役割以外にも、「が」を主語と捉えることに懐疑的である理由として、「が」は「対象の「が」」(尾谷2001)と呼ばれることもある次のような用法がある。

- 31) a. 「デパートでカブトムシが売っている」

- b. 「英語ができる」
- c. 「チョコレートが食べたい」
- d. 「お菓子が好きです」

野田（2012）では、伝統的に主語の規定とされてきたものが次のようにまとめられているが、例31の「が」の用法は、そのいずれにも当てはまらない。

形式的な規定：対格や与格などでなく、主格の形態をしているもの
 文法的な規定：動詞の形態と呼応するという文法的な性質を持っているもの
 意味的な規定：動作や状態の主体を表すという意味を持っているもの
 機能的な規定：何について述べるかを表すという機能を持っているもの

例31のような「が」は、語句を、最重要な項として述語動詞「できる」「売っている」「好きだ」に結び付けるものと捉えることができる。

行為を表す「売る」という形であれば、「売り手」と「売り物」のいずれもが同等に、動詞「売る」に結びつけられる。だが、「売っている」という形は、むしろ状態を表すことになり、通常その状態にあるもの、すなわち「売り物」の重要度の方が、「売り手」の重要度に優る。この情報的な重要度が、「が」が表すものであると考える。

「食べたい」についても同様の説明が可能である。「食べる」は「を格」（ex. お菓子を食べる）を項に取り、食べる人、食べるものを表す語句が同等の重要度で結び付けられ得るが、「食べたい」となった場合にはどちらかの情報的な重要度が優越する。食べる人が聞き手に既に了解されている場合（ex. 話者）、食べる人の情報的な重要度は低く、食べたい対象が最重要な項として結び付けられる。「できる」についても、既に「英語」について言及されていてそれが発話当事者間で共有されているなどの文脈であれば、「英語」の情報量は比較的下がり、「誰が（英語が）できるか」の重要度が上がるが、そうでなければ、述語「できる」に関して最重要なのはできることの内容（ex. 英語）である。

4. 3節でみたように、述べることがらが一つだけである場合には「が」が用いられ、他の同様の要素と並列で扱われる場合には「は」が用いられる。ひとつだけである場合は、当然その唯一のものが最重要項となる。

- 32) a. 頭がズキズキする。(??ズキズキする。)
 b. 頭はズキズキするし、目はかすむし…

日本語の文では、動詞の取る項が必ずしもすべて言語化されるとは限らないが、「ズキズキする」だけを文として成立させるのは難しく、成立させるには特殊な文脈が必要になる。それに対して「ズキズキする」に「が」格を結びつけたaの構造「頭がズキズキする」は、問題なく文として成立する。これは述語動詞「ズキズキする」にとって「頭」が最重要な項であるからである。このことから次のような仮説を立てることができる。

仮説2：「が」は最も重要な項（＝唯一的な結びつき）を表す。

唯一的な結びつきを示すものが複数あるのは矛盾することになるが、下のような「が」を複数含む構造が普通は回避されることから、この仮説は支持される。

33) *辞書が新しいのが良かったら (cf. 新しい辞書が良かったら)

だが次のように、複数の「が」が生起することがある。次の例は二つの「が」が一つの構造内に共起しており、一見仮説2を覆すもののように見える。

34) お父さん、この人が私が好きな人⁵。

しかし、ここには構造の重層性を見なければならない。例34の「この人が私が好きな人」は全体で名詞句を形成している。この名詞句の核となるのは「好きな人⁶」であるが、この核に二つの「が」格は同等に結び付いているのではない。まず核に「私が」が結びつくことで一層目の「私が好きな人」が形成される。「この人」を導く「が」はこの「私が好きな人」に結び付けるのであって、「好きな人」に直接結びつけられているわけではない。

この人が→← [私が好きな人]
私が→←好きな 人

5.3 「が」「の」の属格génitifとしての性質

このことは、「が」が「の」と共通して持っている属格génitifとしての性質に起因すると考えられる。次のような表現では、「の」と「が」は交換可能である。

- 35) a. 自由の丘／自由が丘
b. 我らの母校／我らが母校

これらの例で「の」と「が」はともに属格génitifとして働く。「が」は「の」に、属格génitifとしての役割を取って代わられ、「が」を用いると上の例のようにアルカイックなニュアンスが生まれることがあるが、そのような意味効果の感じられない文中でも「の」と「が」が交換可能に見えることがある。

属格génitifは基本的に名詞同士の関係を表し、前後の二つの要素の関係しか表さない。下の例で、「父の時計の修理」は、全体で一つの名詞句をなし、文中では「を」格となる。

36) 父の(1)時計の(2)修理を頼む

内部に二つの「の」を含み、複合的に見えるが、それぞれ(1)の「の」は「父」と「時計」を結びつけ、名詞句「父の時計」を形成する役割を果たし、(2)の「の」は既に形成された名詞句「父の時計」と「修理」を結びつけ、さらに大きな名詞句を形成する。各々の「の」は唯一的な関係しか表してはいない。これは、例えば「を」が、一つの述語に目的語、場所句など、述語の複数の可能な項のうちのひとつ（同列のもののうちのひとつ）を表すのとは異なるところである。

[が] →← [の]

(cf. 一に格 一を格：同列に複数ある述語への結びつきの一つ)

属格の性格が残っていると考えると、主格と言われてきた「が」の用法も、他の用法と統一的に捉えることができる。が格は結びつき先がそれとのみ関連付けられることを要求し、この点で、他の格と動詞との結び付きとは一線を画す。だが、不定詞infinitifを定形動詞finiにする、すなわち名詞句を文に為すほどの転換ではない。

フランス語では不定詞infinitifに主語以外の要素が結びつき得る。下の例では、目的格（友人をdes amis）、場所格（家にà la maison）は、定形動詞の文にも不定詞句にも生起している。しかし、ひとたび主語が結び付けられると、動詞は定形finiになり現動化actualiserされる。

不定詞：Recevoir des amis à la maison

主語－定形動詞（＝文） Je reçois des amis à la maison.

日本語では「が」による結びつきの後も、名詞句は依然として名詞句であり続ける。このことは「一がー」の構造がコト節の中に収まることでも示される。ひとたび「は」に結び付けられると、コトとは共起できない。

- 37) a. 父が私に時計をくれた
b. 父が私に時計をくれたこと
c. 父の私に時計をくれたこと
d. *父は私に時計をくれたこと

5. 4 現動化actualisationと領域

このような、本来的には名詞句レベルの結びつきである「一がー」の構造が、文として成立する（actualiserされる）ためには、言語文脈もしくは非言語文脈の支えが必要である。4. 3節で見た「頭がズキズキする」は、形態自体はコト節に収まる名詞句相当の構造であるが、話者聞き手間で「患者の症状」というテーマが了解されていることで、このテーマが設定する非t領域内で解釈され、「患者の症状として、そのようなものがある」と理解される。非t領域内に置かれることで、文として成立するのである。

ここで、そのようなテーマの了解もなく、従ってテーマによる非t領域の設定もなく発話される場合にも、「頭がズキズキする」という発話は理解されるのではないかという反論が予想される。だが、先行文脈なくいきなり発話された場合にも、領域は設定され、聞き手にも了解される。この場合には発話状況「今、ここ」、「現時点、発話者」という非言語文脈がt領域を設定し、「（話者の）頭が（今）痛い」という解釈を支えている。この形態のみでは、例えば次のように名詞句相当として文の成分となることができ、必ずしも文として意味を伝達しない。

- 38) a. 頭がズキズキするのは辛いよね。
b. 疲れると頭がズキズキすることはありますか。

形態自体が名詞句相当の構造でしかなくとも、領域が限定されていれば、そこに提示するだけで、文として成立し、意味を伝達することができる。次の例では、非t領域「患者の症状」が医

師—患者間で了解され共有されている。この領域に名詞句「ひどい頭痛」が、いわば放り出されているわけだが、「患者の症状としてはひどい頭痛がある」と正しく伝達される。

- 39) (医師の「どうしましたか?」という問いに答えて)
「ひどい頭痛で」

ここで、「が」の構造が、設定された領域内の唯一の要素を述べるということに注意したい。それが非t領域であれば、テーマに結び付く唯一の要素となるわけで、が格がレーマを表すのはこのようなメカニズムによる。レーマは情報的には最重要要素である。下に見るように、「が」は文が解釈される領域の中で唯一の要素を表す。

- 40) (得意なものを教えてください)
(得意なものは) 英語ができます。

- 41) (どこが痛いのですか?)
頭が痛い。

「が」が情報的に最重要であるレーマを示していることから、唯一性の仮説は支持されることになる。

総記、排他の「が」も同様のメカニズムで説明される。「太郎が学生です」の場合、下の図が示すように、が格が領域内の唯一の要素を述べると考えることで、レーマの「が」と連続して捉えることができる。



図9 「太郎が学生です。」

既に設定済みで了解済みの領域がt領域であれば、領域内に一つある事態を表す。出来事文の場合である。

- 42) a. 風が吹いている。
b. ショートが捕った！(t領域) 出来事文

このように考えることで、レーマ、総記・排他の「が」と主語のように見える「が」を連続的に説明することが可能である。

「が」は、唯一的に述語に（あるいは核となる名詞句に）結びつける。本章で見てきたことから、これはすべての「が」の用法を包括するのではないかと考える。述語が何であっても、また述語が明示されていなくても、「唯一的に結びつける」「領域内の最重要」ということが「が」を用いることで前面に出て解釈可能となる場合もある。

- 43) 「シャンクス、腕が！」

- 44) (手伝いが欲しいような人に駆け寄って)
「あ、僕が！」

このような場合には、注目を集める、驚きを表す⁷、注意を促すなどの意味効果が生まれるが、これは「が」の構造が、「状況(t領域)に唯一の事態」、「話者聞き手間で了解されているテーマに結びつく唯一のことがら」を表すことからくるものである。

5. おわりに

本稿では、日本語の「は」、「が」を含む構造について、フランス語の文成立actualisationと比較しつつ、領域という観点から考察し、「は」「が」それぞれに多様にあると言われる用法を統一的に説明することを試みた。

そのうえで以下のように主張する。

「は」は非t領域を設定する。「一は一」の構造は、非t領域を決定し、そこで解釈される命題を述べている。形態自体で文の成立actualisationがなされている。

「が」は、領域の中で最も重要な項を指し、述語、あるいは核となる名詞との唯一的な結びつきを表す。この結びつきは対名詞句レベルのものであり、「一がー」の構造はそれ自体では文としての成立はなされない。あらかじめ設定されている領域内に置かれることで、はじめて文とし

ての意味内容を伝達するようになる。このような「は」、「が」、それぞれの機能が、談話レベル／文レベル、あるいはより下位の名詞句内で働くことで、対比、総記などの意味効果が出てくると考える。

注

1. 次のような逐語訳も可能である「僕はまだ（お粥の）お皿を持っていて、灰皿として使っている」。
2. 川本（1985）ではthème / proposという用語が用いられている。
3. 属性付与文と時間性の希薄さの関連は、金水（2001）でも指摘されている。「静的述語文（＝本講演での属性付与文に相当）が表す状態は、むしろ話し手の知識とは無関係に、それが真である期間、「特性」として存在している。「特性」は、いわば“もの”としての性質を持って、存在しているといつてよい。“もの”は出来事と違って、時間を超越しているので、本来時間性を持たない。」（金水2001：p.67 強調岸）
4. 引用の「という」を用いて「太郎は次郎を裏切ったということ」、「風はまだ吹いているということ」であれば可能である。
5. この例には「この人＝私を好きな人」という解釈と、「私はこの人を好いている」という二つの解釈が可能である。上記の分析はどちらとも矛盾しない。
6. より小さく「好きな」[人]に分割できるが、議論が煩雑になるためここでは立ち入らない。
7. フランス語訳では、「腕」ton brasだけか（Shanks, ton bras!）、感嘆、驚愕を表すmaisを伴ってShanks, mais ton bras!となっている。

参考文献

- 庵功雄 2010対話創生プロジェクト（第8回日本語教育研究集会）招待講演会「日本語教育文法から見た「は」と「が」－産出に結びつく規則化を目指して－」8月9日 於名古屋大学
- 庵功雄 2014「産出の文法としての日本語文法」0101206901.pdf (hit-u.ac.jp)
- 尾谷昌則 2001「いわゆる“対象のガ格”の正体を求めて－認知文法の観点から－」『白馬夏期言語学会論集』

- 川本茂雄 1985『言語の構造－フランス語そのほか－』白水社
- 岸彩子 2013『フランス語の直説法現在形の意味論』博士論文 京都大学大学院人間・環境学研究科
- 岸彩子 2014「情報の全体性と部分性」『フランス語学の最前線2』ひつじ書房 pp. 215-248
- 岸彩子 2015「実体験知覚と共有知識－未来の事態を表すフランス語直接法現在形－」和田尚明・渡邊淳也編『時制ならびにその関連領域と認知のメカニズム』TAME研究会 pp. 47-73
- 金水敏 2001「テンスと情報」音声文法研究会（編）：『文法と音声3』くろしお出版 pp. 55-79
- 工藤 2012「時間的限定性という観点が提起するもの」影山太郎（編）『属性叙述の世界』pp. 143-176
- 窪菌晴夫 野田尚史 プラシヤント パルデシ 松本曜（編）2021『日本語研究と言語理論から見た言語類型論』開拓社
- 野田尚史 1996『「は」と「が」』くろしお出版
- Carlson, Gregory N. 1977 *Reference to kinds in English*. Doctoral dissertation, University of Massachusetts
- Recanati F. 1996 "Domain of Discourse", *Linguistics and Philosophy*, 19, pp. 445-475.
- Recanati F. 2004 *Literal Meaning*, Cambridge University Press
- Vogeleer S. 1994 « Le point de vue et les valeurs des temps verbaux », *Travaux de Linguistique* 29, pp. 39-58
- Vogeleer S. et W. De Mulder 1998, « Quand spécifique et point de vue », *Cahier Chronos* 3, pp. 213-233